

国立国語研究所学術情報リポジトリ

程度副詞と主体変化動詞との共起

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): degree adverbs, subject-changing verbs, degree of change, degree of resultant state, comparison 作成者: 佐野, 由紀子, SANO, Yukiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001986

程度副詞と主体変化動詞との共起

佐野 由紀子

(大阪大学大学院)

キーワード

程度副詞, 主体変化動詞, 進展性, 変化の度合い, 結果状態の程度

要 旨

従来、程度副詞は状態性の語の他、主体変化動詞とも共起可能であるとされてきた。しかし、程度副詞と主体変化動詞との共起を見ると、程度副詞によって、共起する動詞、修飾の仕方が大きく異なることが分かる。「だいぶ」等の程度副詞は、変化が進展的に進む主体変化動詞すべてと共起するが、「非常に」「ずっと」等の程度副詞は、変化が進展的に進む主体変化動詞のうち、結果状態がそれ以上変化する可能性のないもの（本稿では「進展性に限界のある動詞」としている）とは共起しない。また、修飾の仕方も、「変化の度合い（どの程度変化したか）」を表すか、「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表すかで、それぞれの程度副詞の間に違いが見られる。これにより、「変化の過程」の部分修飾するのか、「結果状態」の部分修飾するのかという、修飾する動詞のアスペクト的側面も異なってくる。

0. はじめに

一般に程度副詞は状態性の語と結びつくが、その他、質や状態の変化を表す主体変化動詞とも共起可能であるとされている。しかし、主体変化動詞についても、程度副詞との共起の仕方は様々である。例えば、

(1) {だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても} 日が暮れた。

(2) 氷が {だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても} 溶けた。

(3) 風邪が {だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても} 治った。

(1)～(3)において、「だいぶ、かなり、少し」等の程度副詞は「暮れる」「溶ける」「治る」と共起するのに対し、「非常に、とても」等の程度副詞はこれらと共起しない。

一方、「温まる」「広がる」「太る」等の主体変化動詞は、これらすべての程度副詞と共起する。

(4) 体が {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 温まった。

(5) 領土が {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 広がった。

(6) {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 太った。

本稿では、どのような主体変化動詞と共起するのかによって程度副詞を分類し、それぞれの程度副詞は、動詞の表すどのようなアスペクト的側面に対して程度限定を行うのか、ということについて考察する。

1. 考察の前提

具体的な考察に入る前に、分析の前提となる主体変化動詞の分類について述べておく。分類のポイントは、変化の「進展性」の有無、ならびに「進展性の限界」の有無の二つである。

1.1. 変化の進展性

主体変化動詞に変化は必須であるが、動詞によって、変化の仕方も様々である。その中には、変化が進展的・漸次的に進んでゆくものがあり、森山(1988)は、これを[進展性]と呼んでいる。「過程を持つ動きであると同時に、その過程において変化が漸次的に進むという意味」(森山1988)である。このような動詞は、「だんだん(しだいに)～してくる／～していく／～しつつある」等の形式をとることができる。

(7) しだいに噂が広まっていく。

このように、変化に[進展性]を伴う動詞句を、以下、[+進展的变化]動詞句(或いは単に[進展的变化]動詞句)、[進展性]を伴わない動詞句を[-進展的变化]動詞句と呼ぶとすると、それぞれ次のように分類される¹。

[+進展的变化]動詞句：

広まる、上がる、温まる、冷える、太る、痩せる、老ける、(日が)暮れる、溶ける

[-進展的变化]動詞句：

死ぬ、割れる、(モノが)落ちる、生まれる、結婚する、(人が)座る、着る、
(人が)消える

1.2. 進展的变化動詞句の下位分類

以上から、主体変化動詞には、変化が進展的に進むものと、進展的に進まないものがあることが分かった。本稿では、このうち変化が進展的に進む動詞句を更に、

- ・進展性に限界を持たない動詞句
- ・進展性に限界を持つ動詞句

に分けることにする²。

進展性に限界を持たない動詞句とは、いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持つものであり、進展性に限界を持つ動詞句とは、変化の結果成立した結果状態が更に変化する可能性を持たないものである。例えば、「(湯が)温まる」と「(湯が)沸く」を比べてみると、前者は、

- (8) a. いくらでも温まる。
b. さっきより温まった。

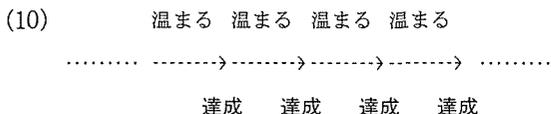
のように言えるが、後者は、

- (9) a. *いくらでも沸く。(「沸くお湯の量がいくらでも増える」という解釈なら可)
b. ??さっきより沸いた。

とは言いにくい。このことは、「温まる」という変化は、変化達成後も更に変化が進展しうるのに対し、「沸く」という変化は、変化が達成されたらもはやそれ以上変化が進展することはない、と

いうことを示している。

別の言い方をすれば、「温まる」は「変化達成が漸次的に累加され、そのたびに程度の異なる結果状態が成立する」という原理的には無限に起こりうる変化であり、ほんのわずかでも温度が上昇すれば一定の変化が達成された（すなわち「温まった」）ことになるのに対し、「沸く」の方は「変化の達成点に至るまでの過程が漸次的に進む」というだけであり、沸騰状態に達しなければ変化が達成された（すなわち「沸いた」）ことにはならないと言える。図示すれば次のようになる。



前者（「温まる」）が進展性に限界を持たない動詞、後者（「沸く」）が進展性に限界を持つ動詞であると考えられる。

従って、本稿で述べる「進展性に限界を持つ動詞」「進展性に限界を持たない動詞」とは、一般に言われる「限界動詞 (telic verb)」「非限界動詞 (atelic verb)」とは性質の異なるものである。「進展性に限界を持つ動詞」も「進展性に限界を持たない動詞」も共に、一般には「限界動詞」に分類される。しかし、それぞれの動詞の「限界性」には相違がある。本稿では、変化達成後も更に変化が進展する可能性を持ち、程度の異なる複数の達成点を想定しうる動詞を「進展性に限界を持たない動詞」、変化は漸次的に進むが、達成点は一つしか想定できない動詞を「進展性に限界を持つ動詞」とする。

進展性を持つ主体変化動詞は、「進展性に限界を持たない動詞」「進展性に限界を持つ動詞」のいずれかに分類できる。

(11) a. いくらでも {(領土が) 広がる / 太る / (背が) 伸びる}。

b. 以前より {(領土が) 広がった / 太った / (背が) 伸びた}。

(12) a. *いくらでも {(日) 暮れる / 腐る / (風邪が) 治る}。

b. ??さっきより {(日) 暮れた / 腐った / (風邪が) 治った}。

(11)の「(領土が) 広がる、太る、(背が) 伸びる」が進展性に限界を持たない動詞句、(12)の「(日) 暮れる、腐る、(風邪が) 治る」が進展性に限界を持つ動詞句である。

このように、進展性に限界を持たない動詞句を [－限界 / 進展的変化] 動詞句、進展性に限界を持つ動詞句を [+限界 / 進展的変化] 動詞句と表すとすると、以下のように分類される。

[－限界 / 進展的変化] 動詞句：

広まる、冷える、上がる、温まる、老ける、高まる、太る、痩せる、伸びる、縮む

[+限界／進展的変化] 動詞句：

暮れる，腐る，凍る，冷める，沸く，溶ける，治る，枯れる，(夜が) 明ける，
(魚が) 焼ける



以下の分析では，変化が進展的に進むか否か，また進展性が限界を持つか否かが重要となる。

2. 程度副詞と主体変化動詞との共起

以上を踏まえた上で，程度副詞はどのような主体変化動詞と共起するのかを見ていく。

2.1. 変化の進展性について

森山(1985)は，程度副詞と共起できる動詞として「主体のあり方が進展的(漸次的)なもの」を挙げている。

しかし，変化が進展的に進む主体変化動詞はすべての程度副詞と共起するのだろうか。以下，変化が進展的に進む主体変化動詞を挙げ，程度副詞との共起を見る。

[+進展的変化] 動詞句

温まる，冷える，(肌が) 焼ける，酔う，寂れる，色づく，濁る，(部屋が) 汚れる，
老ける，やつれる，膨れる，腫れる，高ぶる，湿る，(心が) 晴れる，疲れる，
慣れる，弱まる，太る，痩せる，衰える，伸びる，広がる，広まる，増える，減る，
進む，縮む，上がる，積もる，(差が) 開く，(スピードが) 加わる，治る，暮れる，
(日が) 沈む，(夜が) 明ける，(モノが) 固まる，(建物が) できる，(魚が) 焼ける，枯れる，
崩れる，溶ける，冷める，(不安が) 消える，腐る

(13) 体が {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 温まった。

(14) 領土が {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 広がった。

(15) {だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても} 日が暮れた。

(16) 風邪が {だいぶ／かなり／少し／*非常に／*とても} 治った。

(15)(16)に見るように，「非常に，とても」等の程度副詞は，進展性を持つ主体変化動詞句すべてと共起するわけではない。これに対し，「だいぶ，かなり，少し」等の程度副詞は，これらすべてと共起する。

一方，以下に挙げる進展性を持たない主体変化動詞句は，すべての程度副詞と共起しない。「だいぶ，かなり，少し」等の程度副詞は，これらの動詞句と共起するが，程度ではなく(数)量を表すため，ここでは考察外とする。

[一進展的変化] 動詞句

死ぬ, 散る, 割れる, 落ちる, (大学に) 滑る, 着く, (人が) 消える, 生まれる,
 (行事が) 流れる, 結婚する, 離婚する, 入学する, 入る, 出る, 座る,
 寝る, 諦める, 転ぶ, (花が) 咲く, (役を) 降りる, (病気に) かかる, 締まる,
 就任する, 間違う, 届く, 忘れる, 着る, 履く

- (17) *人が {非常に／とても} 死んだ。
- (18) 人が {だいぶ／かなり／少し} 死んだ。(数量) (程度の解釈不可)
- (19) *{非常に／とても} 寝た。
- (20) {だいぶ／かなり／少し} 寝た。(時間量) (程度の解釈不可)

程度副詞と主体変化動詞との共起をまとめると以下のようなになる。

	+進展的変化動詞句	-進展的変化動詞句
だいぶ, かなり, 少し	○	× (数量なら可)
非常に, とても	△	×

以上のことから, 進展性をもつ主体変化動詞句すべてと共起するのは, 「だいぶ, かなり, 少し」等, 一部の程度副詞であると言える。

2.2. 進展性の限界・非限界について

程度副詞の中には, 「だいぶ, かなり, 少し」のように, 進展性を持つ主体変化動詞すべてと共起するものと, 「非常に, とても」のように, その一部とのみ共起するものがあることが分かった。では, 「非常に, とても」等の程度副詞は, 進展性を持つ主体変化動詞のうち, どのような性質のもの共起するのか。

先に見た分類によると, 主体変化動詞のうち, 変化が進展的に進む動詞には更に, 進展性に限界を持つものと持たないものの二つのタイプが存在した。

[一限界／進展的変化] 動詞句

温まる, 冷える, (肌が) 焼ける, 高ぶる, 寂れる, 色づく, 汚れる, 濁る, 膨れる,
 腫れる, 酔う, 湿る, (心が) 晴れる, 疲れる, 太る, 痩せる, 慣れる, 弱まる,
 衰える, 悪化する, やつれる, 荒れる, ほぐれる, (ものが) 傷む, 増える, 積もる,
 減る, 進む, 上がる, 伸びる, 縮む, 変わる, 広がる, 広まる, (差が) 開く, 遠ざかる,
 (スピードが) 加わる, (後ろに) 下がる, (前に) 出る, (人が) 近づく

- (21) {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 体が温まった。
- (22) {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 領土が広がった。
- (23) 部屋が {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 汚れた。
- (24) {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 太った。
- (25) {だいぶ／かなり／少し／非常に／とても} 差が開いた。

[+限界/進展的変化] 動詞句

暮れる, (日が) 沈む, 治る, 腐る, 溶ける, (建物が) できる, 冷める, 枯れる,
(夜が) 明ける, (魚が) 焼ける, 崩れる, (不安が) 消える, 沸く, 凍る, 固まる,
おさまる, (傷が) ふさがる

(26) {だいぶ/かなり/少し/*非常に/*とても} 日が暮れた。

(27) {だいぶ/かなり/少し/*非常に/*とても} 氷が溶けた。

(28) 風邪が {だいぶ/かなり/少し/*非常に/*とても} 治った。

(29) 湯が {だいぶ/かなり/少し/*非常に/*とても} 沸いた。

(30) {だいぶ/かなり/少し/*非常に/*とても} 傷がふさがった。

(21)~(25), (26)~(30)から分かるように, 「だいぶ, かなり, 少し」などの程度副詞は, 変化が進展的に進む主体変化動詞句すべてと共起するが, 「非常に, とても」等の程度副詞は, このうち進展性に限界のない動詞句としか共起しない。

従って (31) (32) のように, 同じ主体変化動詞であっても, 変化の対象によって, 進展性に限界がない解釈の場合は「非常に, とても」等と共起するし, 限界を持つ解釈の場合は「非常に, とても」等と共起できない。

(31) 非常に気分が沈んだ。 …[-限界/進展的変化]

*非常に日が沈んだ。 …[+限界/進展的変化]

(32) 非常に肌が焼けた。 …[-限界/進展的変化]

*非常に魚が焼けた。 …[+限界/進展的変化]

これに対し, 「だいぶ, かなり, 少し」等はこれらすべてと共起する。

(33) かなり気分が沈んだ。

かなり日が沈んだ。

(34) かなり肌が焼けた。

かなり魚が焼けた。

また, (35) (36) のように, 意味的に類似していても, 「冷える」は進展性に限界がないため「非常に」等と共起するのに対し, 「冷める」は進展性が限界を持つため「非常に」等と共起しない。

(35) ビールが非常に冷えた。 …[-限界/進展的変化]

(36) *風呂の湯が非常に冷めた。 …[+限界/進展的変化]

ここで仮に, 進展性を持つ主体変化動詞句すべてと共起する程度副詞を「だいぶ」類, 進展性を持つ主体変化動詞句のうち, 進展性に限界のないものとのみ共起する程度副詞を「非常に」類とすると, 次のように分類される。

「だいぶ」類: だいぶ, かなり, 少し, 多少, ちょっと, やや, いささか, ずいぶん

「非常に」類: 非常に, とても, はなはだ, すこぶる, 極めて, たいへん, なかなか, ばかに, やけに, けっこう, 割合

2.3. まとめ

以上、「だいぶ」類「非常に」類と主体変化動詞との共起をまとめると以下の表が得られる。

	+進展的変化動詞句		-進展的変化動詞句
	-限界	+限界	
「だいぶ」類	○	○	×
「非常に」類	○	×	×

3. 程度限定の仕方の違い

前節では、「だいぶ」類と「非常に」類が「どのような主体変化動詞と共起するか」という点で異なる性質を示すことを見たが、本節では、それぞれの程度副詞が「動詞の表すどのようなアスペクト的側面に対して程度限定するのか」という点で異なることを見ていく。

3.1. 「変化の度合い」と「結果状態の程度」

(37) 非常に天気がよくなった³。

(38) だいぶ天気がよくなった。

(37)(38)は共に自然な文であると思われる。

しかし、(37)と(38)とでは表す状況が異なる。すなわち、(37)が表わしているのは「現在天気がよく、その程度が甚だしい」ということであるが、(38)の方は「現在天気がいい」ということは必ずしも述べていない。そのことは、次のことから明らかである。

(39) a. *非常に天気がよくなったが、まだ天気がいいとは言えない。

b. だいぶ天気がよくなったが、まだ天気がいいとは言えない。

(40) (「激しい雨がやんで曇りの状態になった」という状況で)

a. *非常に天気がよくなった。

b. だいぶ天気がよくなった。

「だいぶ」は、一般に、ある状態の程度が高いことを示す程度副詞であると考えられているが、(38)のように主体変化動詞と共起した場合には、「変化の度合い」が大きいことを表す。つまり、「変化の度合い」さえ大きければ、結果状態が「晴れ」の状態であっても「曇り」の状態であっても、「だいぶ天気がよくなった」と述べられるのである。これに対し、「非常に」は、「変化の度合い」に関係なく、変化の結果として実際に程度の甚だしい状態になれば、「非常に天気がよくなった」とは述べられない。

このことから、「だいぶ」類の程度副詞と「非常に」類の程度副詞とでは程度限定の仕方が異なることが分かる。「だいぶ」類の程度副詞は、変化前と変化後の状態の差、つまり「変化の度合い(どの程度変化したか)」を述べるのに対し、「非常に」類の程度副詞は「結果状態の程度(変化後どの程度になったか)」を述べている⁴。従って動詞の表すアスペクト的側面のうち、「だいぶ」類は、

変化の過程の部分を修飾するのに対し、「非常に」類は、結果状態の部分を修飾するといえる。

3.2. 「一なくなる」との共起

以上のように、「だいぶ」類の程度副詞と、「非常に」類の程度副詞とで、程度限定の仕方が異なることは、「一なくなる」との共起からも確かめられる。

一般に程度副詞は否定形式と共起しにくい⁵。

(41) *非常にきれいでない。

*だいぶ寒くない。

*少し明るくない。

しかし、工藤(1983)が言うように、一部の程度副詞は「一なくなる」と共起することがある。この「一なくなる」と共起する程度副詞を挙げると、「だいぶ、かなり、少し」等であり、本稿で言う「だいぶ」類の程度副詞と一致する⁶。

(42) {だいぶ/かなり/少し} 寒くなくなった。

これに対し「非常に」類は、やはり「一なくなる」という否定形式と共起しない。

(43) *{非常に/とても} 寒くなくなった。

この現象についても、上で述べたそれぞれの程度副詞の程度限定の仕方の違いによって説明できる。すなわち、「だいぶ」類の程度副詞は主体変化動詞と共起したとき、「変化の度合い」を表す。従って、

[<ある状態に>なる]

における「なる」という変化の部分のみを修飾することになる。同様に「一なくなる」が「だいぶ」類の程度副詞と共起したときも、

[<ある状態でない状態に>なる]

における「なる」という変化の部分のみを修飾する。従って、「だいぶ」類の程度副詞は否定形式を直接修飾することにはならないため、「一なくなる」と共起できる。

これに対し、「非常に」類の程度副詞は、主体変化動詞と共起したとき「結果状態の程度」を表すため、

[<ある状態に>なる]

における「ある状態」の部分修飾する。同様に「一なくなる」と共起したときも、

[<ある状態でない状態に>なる]

における「ある状態でない状態」という否定を含む部分を修飾することになる。しかし、ここで程度副詞と否定形式との共起制限に抵触するため、(43)は不自然となり、「非常に」類の程度副詞は「一なくなる」と共起できないといえる。

このように、主体変化動詞の程度限定の仕方を考えることによって、程度副詞と「一なくなる」との共起における問題も説明することができる。

3.3. 「だいぶ」類が表す「結果状態の程度」

以上から、主体変化動詞と共起したとき、「だいぶ」類は「変化の度合い」、「非常に」類は「結果状態の程度」を表すことが明らかとなった。ただし「だいぶ」類は、「変化の度合い」の他、次のように「結果状態の程度」を表す場合がある。

(44) 16年間も水につかっていた部品は、かなり傷んでいた。(朝日新聞社説890126)

主体変化動詞のテイル形では、一般に結果状態が取り上げられ、進展的な変化の過程は取り上げられにくい。このように、結果状態が取り上げられた場合については、「だいぶ」類であっても、「結果状態の程度」を表しうるのである⁷。

従って、「だいぶ」類は基本的には「変化の度合い」を表すが、結果状態が取り上げられた場合については、「結果状態の程度」を表すこともできるといえる。

3.4. まとめ

程度副詞と主体変化動詞との共起、程度限定の仕方をまとめると次のようになる。

・「だいぶ」類

共起する動詞句…進展性を持つ主体変化動詞句すべて

程度限定の仕方…「変化の度合い（どの程度変化したか）」或いは

「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表す

・「非常に」類

共起する動詞句…[一限界／進展的変化] 主体変化動詞句

程度限定の仕方…「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表す

4. 説明

以上のような程度限定の仕方の違いから、「だいぶ」類と「非常に」類とで共起する主体変化動詞が異なる、という言語事実は自然と説明が与えられる。

前節で明らかとなったように、主体変化動詞と共起したとき、「だいぶ」類は「変化の度合い」或いは「結果状態の程度」を表し、「非常に」類は「結果状態の程度」を表す。

「変化の度合い」とは、漸次的な変化においてどの段階まで変化したか、その段階性を述べるものである。従って、主体変化動詞文において「変化の度合い」を表す「だいぶ」類の程度副詞は、漸次的な変化の過程が取り上げられる動詞、すなわち進展性を持つ動詞句と共起するのである。

一方、「結果状態の程度」を表すためには、当然、結果状態に程度性がなければならない。結果状態が程度性を持つ動詞句というのは、変化が漸次的に進み、且つ結果状態も漸次的に累加され得る（すなわち程度の異なる複数の結果状態が想定されうる）動詞句である。進展性を持つ主体変化動詞句はすべて変化が漸次的に進むが、そのうち[+限界]動詞句が表す進展的変化とは、「一定の結果状態にいたる過程が漸次的に進展する」というだけのことであり、結果状態には更なる進展が望めず、また程度性を想定することもできない。従って、「結果状態の程度」を表す「非常に」類は、変化が進展的に進み、且つその進展性に限界のない[一限界／進展的変化]動詞句とのみ

共起するといえる。

また、「だいぶ」類は「変化の度合い」を表すことも「結果状態の程度」を表すこともできるが、[+限界] 動詞句は結果状態が程度性を持たないため、これと共起した場合、「だいぶ」類は「結果状態の程度」を表すことはできず、テイル形であっても当然「変化の度合い」を表すのみである。

(45) だいぶ日が暮れている。(変化の度合い)

以上のように、動詞の表すアスペクト的側面のうち、「だいぶ」類は変化の過程の部分も、結果状態の部分も修飾しうるのに対し、「非常に」類は結果状態の部分のみを修飾するのみである。「だいぶ」類と「非常に」類とで共起する主体変化動詞が異なるという言語事実は、このような、それぞれの程度副詞の程度限定の仕方の相違によるものであるといえる。

5. 「ずっと」類

次に、常に他との比較を表す「ずっと、はるかに、一層」等の程度副詞について述べる⁸。

これらの程度副詞は、主体変化動詞文において「だいぶ」類と同じく「変化の度合い」を表す。実際、

(46) さっきよりずっと天気がよくなった。

は、「さっきよりだいぶ天気よくなった」と同様、「現在天気がいい」ことを必ずしも述べていない。変化後の状態が曇りであっても、変化前と変化後との差が大きければ、(46)は用いられる。また、

(47) さっきよりずっと寒くなくなった。

のように、「一なくなる」との共起が可能であることから、「ずっと」等は「変化の度合い」を表し、動詞の表すアスペクト的側面のうち、変化の過程の部分修飾することが分かる。

しかし、「ずっと」は「だいぶ」類とは異なり、[+進展的変化] 動詞句すべてと共起するわけではない。以下に示すように、[+進展的変化] 動詞句のうち進展性に限界を持つものとは共起しにくいのである。

(48) 前よりずっと領土が広がった。[-限界/進展的変化]

(49) さっきよりずっと温まった。[-限界/進展的変化]

(50) ??昨日よりずっと風邪が治った。[+限界/進展的変化]

(51) ??さっきよりずっと湯が沸いた。[+限界/進展的変化]

1.2.で述べたように、[+限界/進展的変化] 動詞句は、いったん変化が達成されたら更に変化が進展することはなく、また達成点の一つしか想定できないため、「さっきより」などという比較構文には立ちにくい。ところが「ずっと」等の程度副詞は、「常に他との比較を表す」という性質を持つ。このため、「ずっと」等の程度副詞は[+限界/進展的変化] 動詞句とは共起しにくいのである⁹。

このように、「ずっと」等の程度副詞は「だいぶ」類と同様、「変化の度合い」を表すが、「だいぶ」類とは異なり、進展的変化動詞句のうち進展性に限界を持つものとは共起しにくい。このような程度副詞を「ずっと」類とすると、「ずっと、一層、いちだんと、もっと、はるかに、よほど、

更に」等が挙げられる。

6. 「状態性の語との共起」との関連

さて、ここまでは程度副詞と主体変化動詞との共起について考察を行なった。ここで、もう一度程度限定の仕方を確認しておく。

- ・「非常に」類：「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表す
- ・「だいぶ」類：「変化の度合い（どの程度変化したか）」或いは
「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表す
- ・「ずっと」類：「変化の度合い（どの程度変化したか）」を表す

本節では、このような、主体変化動詞との共起における程度副詞の意味機能が、状態性の語との共起における用法から導かれることを示す。

渡辺(1990)は程度副詞を、比較構文(XはYより-Aだ)に立つか、計量構文(Xは-Aだ)に立つか、またいずれの構文にも立つかなどの点から分類した¹⁰。「非常に、とても、たいへん、極めて、なかなか」等の程度副詞は、

(52) *ひかりはこだまよりとても早い。

と、比較構文に立たないことから発見系、「多少、かなり、すこし、ちょっと、もっと、ずっと、一層、はるかに、いちだんと」等の程度副詞は、

(53) 彼は彼女より多少話が分かる。

と、比較構文に立つことから比較系とした。更に比較系の程度副詞を、

(54) 彼は多少なまいきな所があるね。

と計量構文にも立つもの(多少類：すこし、ちょっと、やや、いささか、かなり)と、計量構文に立たないもの(もっと類：ずっと、よほど、一層、はるかに、いちだんと)とに分類している¹¹。

・発見系(Xは-Aだ)

非常に、とても、はなはだ、すこぶる、たいへん、極めて、ずいぶん、けっこう、
なかなか、わりに、ばかに、やけに

・比較系

多少類(XはYより-Aだ)(Xは-Aだ)：

かなり、すこし、ちょっと、やや、いささか、多少

もっと類(XはYより-Aだ)：

もっと、ずっと、よほど、一層、はるかに、いちだんと

興味深いことに、この分類は、先に見てきた主体変化動詞との共起における分類に一致することが分かる。すなわち、渡辺の言う発見系・比較系多少類・比較系もっと類の程度副詞は、本稿で述べた「非常に」類・「だいぶ」類・「ずっと」類にそれぞれ一致するのである。

まず、「非常に」類、つまり渡辺の言う発見系の程度副詞について、状態性の語と共起する場合を見ると、これらの程度副詞は発見系の定義からも分かるように、比較構文を取ることができず、「状態そのものの程度」を表すのみであるといえる。一方、主体変化動詞と共起したときは、既に

述べたように、「結果状態の程度」を表す。つまり、状態性の語と共起したときも主体変化動詞と共起したときも、共に、「ある状態そのものの程度を表す」という点で共通するのである。

「非常に」類＝発見系

- ・状態性の語と共起（計量構文）…状態そのものの程度を表す
- ・主体変化動詞と共起…結果状態の程度を表す

これに対し、「だいぶ」類、つまり渡辺の言う比較系多少類の程度副詞は、状態性の語と共起するとき、計量構文も比較構文もとることができる。計量構文では「状態そのものの程度」を表し、比較構文では「他の状態との程度差」を表す。一方、主体変化動詞と共起したときは、先に見たように、「結果状態の程度」或いは「変化の度合い」を表す。「変化の度合い」とは、すなわち「変化前の状態と変化後の状態との程度差」であるともいえる。従って、「だいぶ」類は、状態性の語と共起したときも主体変化動詞と共起したときも共に、「ある状態そのものの程度を表す」ことも、「ある状態とある状態との程度差を表す」こともできるといえる。

「だいぶ」類＝比較系多少類

- ・状態性の語と共起（計量構文）…状態そのものの程度を表す
（比較構文）…他の状態との程度差を表す
- ・主体変化動詞と共起…①結果状態の程度を表す
②変化の度合いを表す

更に、「ずっと」類、つまり渡辺の言う比較系もつと類の程度副詞は、状態性の語と共起したとき常に他との比較に関わり、「他の状態との程度差」を表す。一方、主体変化動詞と共起したときは、先に見たように、「変化の度合い」を表す。つまり、「ずっと」類は、状態性の語と共起したときも主体変化動詞と共起したときも、共に、「ある状態とある状態との程度差を表す」という点で共通するのである。

「ずっと」類＝比較系もつと類

- ・状態性の語と共起（比較構文）…他の状態との程度差を表す
- ・主体変化動詞と共起…変化の度合いを表す

以上のように、状態性の語と共起するとき比較構文に立って他の状態との程度差を表すものは、主体変化動詞と共起したときも、変化前の状態との程度差を表す。また、状態性の語と共起するとき計量構文に立って、状態そのものの程度を表すものは、主体変化動詞と共起したとき、結果状態の程度を表す。このように、状態性の語と共起したときの意味機能は、そのまま主体変化動詞との共起にも反映されている¹²。そして、「だいぶ」類と「非常に」類とで共起する主体変化動詞が異なるという言語事実は、このようなそれぞれの程度副詞の程度限定の仕方の相違によるものだといえるのである。

7. おわりに

従来、程度副詞は状態性の語の他、主体変化動詞とも共起可能であるとされてきた。本稿では、程度副詞がどのような主体変化動詞と共起するのか、また動詞の表すどのようなアスペクトの側

面を修飾するのかを明らかにし、それは程度副詞によって大きく異なることが分かった。以上、本稿で主張したことをまとめると、次のようになる。

①程度副詞は主体変化動詞との共起から、次のように分類される。

- ・「だいぶ」類：だいぶ、かなり、少し、多少、ちょっと、やや、いささか、
ずいぶん
- ・「非常に」類：非常に、とても、はなはだ、すこぶる、たいへん、極めて、
なかなか

②それぞれの程度副詞は、主体変化動詞と共起するとき、その修飾の仕方が異なる。

- ・「だいぶ」類：「変化の度合い（どの程度変化したか）」或いは
「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表す
- ・「非常に」類：「結果状態の程度（変化後どの程度になったか）」を表す

③これに伴い、修飾する動詞のアスペクト的側面も異なる。

- ・「だいぶ」類：「変化の過程」或いは「結果状態」を修飾する
- ・「非常に」類：「結果状態」を修飾する

④「変化の度合い」を表すためには、変化が進展的に進まなければならない、また「結果状態の程度」を表すためには、結果状態が程度性を持たなければならない。従って、それぞれの程度副詞は、次の動詞句と共起する。

- ・「だいぶ」類：進展性を持つ主体変化動詞句すべて
- ・「非常に」類：[－限界／進展的变化] 主体変化動詞句

注

- 1 同じ主体変化動詞でも、変化の対象によって、[進展性]を伴うか否かに違いが見られる場合がある。例えば「落ちる」は、「本が床に落ちる」場合は[－進展的变化]と考えられるが、「人氣が落ちる」という場合には[＋進展的变化]となる。また、「座る」は、「人が椅子に座る」という場合は[－進展的变化]と考えられるが、「(赤ん坊の)首が座る」という場合には[＋進展的变化]となる。
- 2 後にも述べるが、一般に言われる「限界的 (telic)・非限界的 (atelic)」とは異なる。
- 3 ここで「(天氣が)よくなる」という形容詞的要素を含む主体変化動詞句を用いたのは、結果状態と変化の部分とを切り離して考えることができ、それぞれの程度副詞の修飾の仕方の違いが見えやすいこと、また“天氣”の変化は、「曇り」という中間的な状態が存在し、説明に好都合であったことからである。従って、形容詞的要素を含まない他の主体変化動詞句でも、勿論同様のことが言える。
- 4 「非常に」類と共起するとき、主体変化動詞は、話者によってはテイル形にした方がより自然になるかもしれない。

ビールが非常に冷えた。／ビールが非常に冷えている。

川の水が非常に濁った。／川の水が非常に濁っている。

これは、テイル形にした時のほうが、より結果状態が取り上げられやすく、解釈が安定するため

である。このことは、「非常に」類が「結果状態の程度」を表すことの証左ともなる。

- 5 ただし、「けっこう、割合」等は、否定形式と共起する。
- 6 「一なくなる」と共起する程度副詞は、この他「ずっと、もっと、一層」等があるが、これについては5節で述べる。
- 7 テイル形と共起したときいつも「結果状態の程度」を表すわけではなく、「結果状態の程度」を表すか、「変化の度合い」を表すかは、場面や文脈等によって決まる。また、「だいたい」類の中でも個々の程度副詞の性質の違いによって、より「変化の度合い」を表しやすいもの、「結果状態の程度」を表しやすいもの等の差がある。
- 8 「ずっと」類の中でも、「ずっと、はるかに」等と「もっと、一層」等では、多少用法に違いが見られるが、詳しい説明は別稿にゆずる。
- 9 ただし、[+限界] 動詞句が比較構文に立つかどうかについては、判断が微妙なケースが少なくない。[+限界] 動詞句の中でも、例えば次のように比較構文に立ちやすいものもある。

さっきより痛みがおさまった。

ゼリーがさっきより固まった。

これらは、結果状態の程度が進行したと言うよりは、「さっき」の時点では変化が達成されておらず、単に「さっきより変化達成に向かって一歩進歩した」というだけの意味で用いられている。[+限界] 動詞句の中には、例外的にこのような解釈が容易にされ、比較構文に立つものがある。そしてこの場合には、「ずっと」との共起も可能になるのである。

さっきよりずっと痛みがおさまった。

ゼリーがさっきよりずっと固まった。

因に「非常に」類の程度副詞も、進展性を持つ主体変化動詞のうち[+限界] 動詞句とは共起しないが、「非常に」類の場合は、[+限界] 動詞句すべてと常に共起しない。

*非常に痛みがおさまった。

*非常にゼリーが固まった。

- 10 渡辺はそのほか判断構造・評価・表現性などの点から程度副詞を4つに分類しているが、ここでの議論に直接関係がないため、比較構文に立つか計量構文に立つかによる分類のみを採用する。
- 11 「だいたい」は、渡辺のリストの中には含まれていないが、

彼は彼女よりだいたい話が分かる。

彼はだいたいなまいきな所があるね。

と、比較構文にも計量構文にも立つため、本稿では比較系多少類と考える。

また、渡辺の分類では、「ずいぶん」は発見系となっているが、服部(1996)において、「ずいぶん」は比較構文にも立ちうるものが、多くのデータをもとに明らかにされている。従って、本稿でも「ずいぶん」は比較系多少類と考える。

- 12 この他、数量を表す程度副詞との相関も考えられる。程度副詞の中には、次の例のように、程度のほか、(数)量を表しうるものがあることは広く知られている。

だいたい食べた。(量)

森山(1985)は、このような程度副詞を「量的程度副詞」と呼んでいるが、「だいたい」類の程度副詞はすべて、この量的程度副詞に含まれる。これは、「だいたい」類が表す「変化の度合い」とは、量の一つとも考えられるためであろう。しかし、このことは、「ずっと」類については当てはまらない。「ずっと」類は、「だいたい」類と同様、「変化の度合い」を表すが、このうち、「ずっと、一層、はるかに」などは、数量を表せず、量的程度副詞とは考えられないのである。従って、量的程度

副詞と「変化の度合い」を表す程度副詞とが完全に一致するとはいえない。

参考文献

- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- 服部 匡 (1996) 「程度副詞と比較基準—「多少」、「少し」を中心に—」『同志社女子大学学術研究年報』
47
- 仁田 義雄 (1983) 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10
- 森山 卓郎 (1985) 「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20
- (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 渡辺 実 (1990) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23

付 記

本稿は、平成8年度国語学会秋季大会での口頭発表をもとにその後の考察を加えたものである。席上その他において多くの方より御教示を賜った。また本稿をまとめるにあたり、三宅知宏氏より多くの御意見をいただいた。また査読者の先生方からは細部にわたりご指導をいただいた。ここで心から感謝の意を述べたい。ただし不備、誤り等は当然全て筆者の責に帰せられるものである。

(原稿受理日：1997年12月15日)

佐野 由紀子 (さの ゆきこ)

大阪大学大学院博士課程 630-0239 生駒市青山台117-82

Degree adverbs and subject-changing verbs

SANO Yukiko

Graduate School, Osaka University

Keywords

degree adverbs, subject-changing verbs, degree of change, degree of resultant state, comparison

Degree adverbs can co-occur with subject-changing verbs, besides with stative predicates. When we investigate how degree verbs and subject-changing verbs co-occur, we see that what types of verbs co-occur and how degree adverbs qualify them vary in great measure according to the type of degree adverbs.

Degree adverbs can be classified into three types, *daibu* type, *hijoni* type and *zutto* type. On the one hand, degree adverbs of *daibu* type co-occur with subject-changing verbs if the subject-changing advances gradually. On the other, those of *hijoni* type and *zutto* type co-occur with subject-changing verbs when the subject-changing advances gradually and resultant state can be changed more.

As to how degree adverbs qualify subject-changing adverbs, *daibu* type adverbs denote how much it has changed and how the resultant state has become. However, *zutto* type adverbs signify only the former of the two. *Hijoni* type adverbs signify only the latter of the two. This is why degree adverbs vary in which aspectual phase they qualify, whether they qualify the phase of changing process or that of resultant state.

Semantic function of degree adverbs when co-occurring with subject-changing verbs can be deduced from their usage when co-occurring with stative predicate. The above-mentioned classification of degree adverbs corresponds to the classification in the light of whether the degree adverbs can appear in comparative constructions.